

模擬演奏的な動き ～その分析と適用への一考察

Imitation of Music Performance by Pyhsical Movement — Its Analysis and Application —

武 田 道 子
Michiko TAKEDA

（平成3年10月11日受理）

序論

音楽教育現場において、方法への基本的な原理に発するものとして、その重用を主張したいと考えるいわゆる“模擬演奏”には、未だにその価値観を明確にする概念規定が存在していない。音楽教育用語としての学術的・現場的つまり理論と実践の体系的な裏付けをもった先行研究が見当たらないのである。

しかし、「動きと音楽」の一般的・広汎な次元での論説～主張は、世界の音楽教育思潮の中にそのいくつかを瞥見することができる。主なものとして次がある。

* C・Orff¹⁾ (1895～1982)

音楽の要素として「言語」・「リズム」・「運動」の3つに着眼している。

* E・J・Dalcroze (1865～1950)

「音楽は音と動きから成り立ち、音楽の表現を豊かにするのは動きとリズムである。」²⁾と述べている。

* 村浦とく (1973～)

「～ジャック・ダルクローズは音楽教育の効果的な一方法として『ユーリズムックス』を考案した。これは音のリズムを覚えさせるために身体運動を手段として利用したもので、音楽特に音楽の視覚化である。したがって動きのリズムのように、合理的な美しい運動による表現活動とは目的が全く異なっている。」³⁾と述べている。

さて、このようにして“動きと音楽とは不可分のもの”——ここにみられる動きには、1つは舞踊的表現、もう1つは音楽的表現と言っても決して過言ではない程に限りなく音楽そのものに近い身体的な反応の2つが存在するのである。前者は前述の村浦の言う“動きのリズム”であり、後者は音楽教育内容のうちに位置づけられるものである。なお、この両者は当然のことながら現われとしては一見未分化の様態であることが多い。本論文において幼児の音楽教育への手段として設定・提示された“模擬演奏”～“模擬演奏的な動き”はこの後者に包含され、幼児にみる動きの核的な要素として抽出されたものである。

なお、以上述べたところを補足する簡単な具体例を次に示す。

<舞踏的動き>……題材“ぞうさんになって”

ぞうのあるく様子、鼻や耳の動き、餌を食べる様子、水浴びの仕草など、ぞうの特徴を十分に観察し、全身をバランスよく使い、ぞうになりきっての表現をその目的とする。

その時、音楽はそれらの動きを助長し、スムーズにする為にしばしば用いられることが多い。

<音楽的動き>……題材“ぞうさん”（まどみちお詞・團 珂玖磨曲）——歌遊び

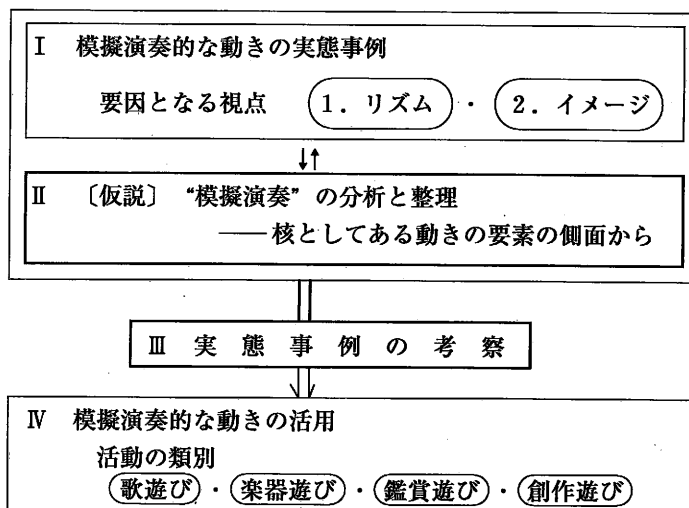
事例——“お弁当の時、4才児のD男がみかんの皮を長くむき、それを鼻につけて「ぞうさんだ!!」と叫んだ。そしてすぐにぞ～うさん ゾ～うさん……と歌いながら、身体やみかんの皮の鼻を左右に揺らしてのぞうになりきった楽しい身振りである。M男やH子も真似して歌い出した。”

このように、ぞうの鼻を振る動きによって、題材からのイメージに浸り、さらに3拍子感や形式感を感覚的にとらえて楽しむという表現が目的である。

本論文は、このようにして、主題のもつ意義を確かめ、内容を分析し、適用への問題にまで迫ろうとするものである。ふくよかな音楽的感性と豊かな表現の力の啓培のためにということである。

なお、この場合、あえて“模擬演奏的な動き”の表現をとった意味合いについてであるが、これはあくまでも幼児の動きの総体を支配する核的なもののよみかえであることを重ねて確認しておかねばならない。一方、これが文字通り直接的に楽器の技能面に反映することも自明である。それは、奏法技能は挙げて運動技能の獲得過程に協応して育つものだからである。

論述への構想は次のようである。



なお、IIの仮説の構成は、筆者による次の先行研究からまとめられたものである。

① 幼児の楽器遊び～Combinationの側面からとらえた指導法のくふう（日本音楽教育学会音楽教育学第10号）

② 遊びを核とする幼児音楽指導の展開（日本保育学会第41回大会 研究論文集）

③ 動きに結ぶ歌遊び（'91日本総合教育研究会 実技発表）

I 遊びに見られる模倣演奏的な動きの実態

音楽を媒介として誘発される動きは、子どもの気持のおもむくまま自由奔放、種々様々な形で表現されている。ここでは、論文の主旨に添う模倣演奏的な動きに結ばれる事例についてとりあげる。

なお、この研究調査の対象となった実態の事例は、焼津市みやじま幼稚園・みなと幼稚園（3才児4クラス、4才児5クラス、5才児5クラス）の“あそびの記録集”（1990年4月～12月）がその出典である。2園とも、子どもが生き生きと遊んでいる姿を追い求め、それぞれのクラス担任が自由遊びの様子を刻明に記録したものである。

1. 特徴的なリズムに誘発された動き

<事例1>

給食の「いただきまーす」の挨拶をしようとした時。A男「まってー まだできてないよー」～この言葉にすかさずH男「あっ あわてんばだ!!」といいながら、戸あわてんばうのサンタクロース～戸と歌い出した。すると他の子もつられて歌い出し、たちまち大合唱!!……“ドンドンドン”のリズムに合わせて、テーブルの上の皿やコップを太鼓代わりに叩き、また“チャッチャッチャッ”では3つ打ちのリズムで手拍子、踊り出す子も出ての大にぎわい。「皿やコップを叩くのは?」と思ったけれど、また一方、このとても楽しいひとこまを大切に见守りたいとも思った。

<事例2>

“山の音楽家”の歌を私（担任）がエレクトーンの伴奏で歌った。そばにいる子ども達は、得意になって指を動かしたり、頭をゆらしたりしながら一緒に歌う。そして、曲の終わりの戸いかーがです戸の所にくると自分たちのひきまねに拍手をしていた。

<事例3>

音楽会の時に演奏した“おもちゃソングメドレー”のテープに合わせて、保育者そっくりのしぐさで指揮者の真似をしている。リズムや強弱にのり、とてもよく先生の特徴をとらえていた。そばでブロックや人形で遊んでいた子も早速に仲間入り、そして手拍子を入れたり、木琴のパチをもっているつもりでの模倣演奏。音楽が終わると「もう一度かけよう」と何回もくり返し楽しんでた。

<事例4>

黒板の前に長机を1つ、椅子を3つ置いた。そして、3人の女の子がそこに座わり何やら話をしていた。やがて、ひとりの子が本棚から絵本を一冊持ってきて、黒板に立てかけるようにしておく他の子も同じようにした。するとひとりの子が絵本を指さし「ここから始って、ここがおわりのところね」と言っている。「ちびまるこちゃんの歌にしよう」と他のひとりが言う。3人で歌を歌いながら、長机をピアノにみたてて指を動かすはじめた。絵本は楽譜がわり、ピアノのおけいこごっこらしい。指は鍵盤の音の動きとは違うが、リズム通りに動いていた。

2. 題材からくるイメージに結んで表現された動き

<事例1>

2～3人の男の子が絵本をのぞき見ていた。そこにたぬきの絵がのっていた。すると、ひとりの子が突然戸げんこつやまの たぬきさん戸と歌いながら手遊びをはじめた。つら

れて、他の子も月おっぱいので ねんねして月と後に続いて歌い出した。終わるとまたはじめから歌い出し、何回もくり返し楽しんでた。

<事例2>

“ポンキッキ”の曲をB・G・Mにした時のこと——、「花のっぽん さのよいよい」という所でひろし君が即興で踊り出した。てつや君も真似をして加わる。首を上下・左右に振ったり、月さいた さいたよ月では両手を上に挙げおおいかぶさるような動作を2回続け、月パッとさいた月では両手を頭上で打ち合わせてからジャンプをしていた。また、さらに両手を左右に揺らして風がそよふく動作を入れたりしてふりを楽しんでいた。

曲を聞いて、例えば、コップやおもちゃを叩くとか、シンバルの打ち真似とか、ピアノのひきまねのようなことはよくあったが、子どもが自分でふりつけて踊ったのは初めてだった。見ていてとても嬉しかった。

<事例3>

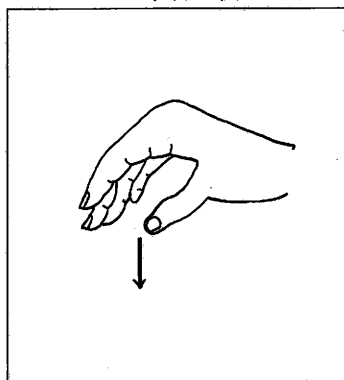
“ラブミーテンダー”の曲を私（担任）がエレクトーンでひくと、すわっていたあゆみちゃんがふっと前に出て踊り出した。それを見てひとみちゃんも一緒に踊りはじめる。胸に手をあてて交叉し、高いところからキラキラして手をおろすというふりで、首をまげたりしてポーズをとっていた。突然のことでびっくりしたが、リズム感の良さに感心するばかりだった。

II 模擬演奏の動きの分析

ここでは、実際の楽器～その奏法に結ぶ動きを分析し、それを類型化するのが目的である。そして、併せてそれぞれの動きに結ばれるイメージについても模式的な考察を試みたいと思う。つまり、イメージ豊かな表現の力を育てるという視点に照らした時、それは必須のものであるからである。

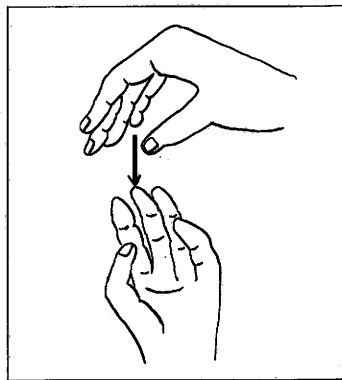
1. 動きの類型と対応する楽器

【A】のパターン……手首を使った上・下の動き



(絵1)

または両手で

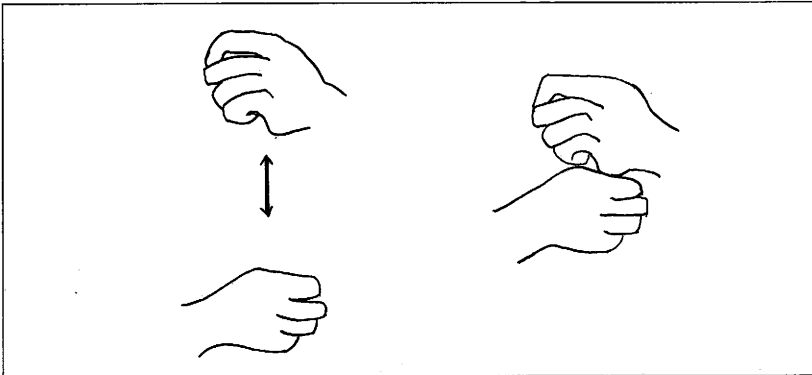


(絵2)

* 対応する楽器

・カステネット ・タンブリン (指先打ちと手のひら打ち) ・トライアングル (リズムの打奏) ・小太鼓 ・拍子木 ・ボンゴ ・マラカス ・木琴 ・鉄琴 ・身体楽器 (手拍子、膝打ちなど)

[B]のパターン……[A]の変形で、両手こぶしを上・下に打ち合わせる動き

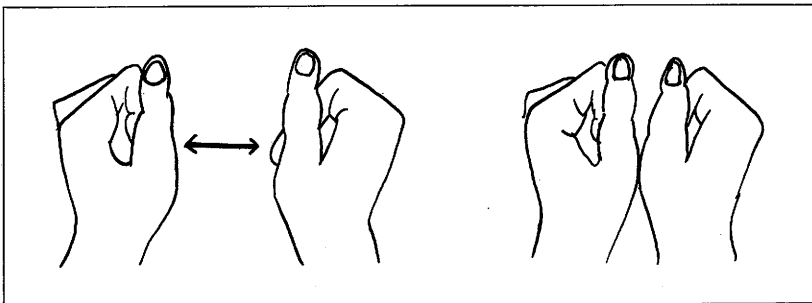


(絵3)

* 対応する楽器

・鈴（リズムの打奏） ・タンブリン（わく打ち） など

[C]のパターン……両手こぶし、または両手のひらを左右から打ち合わせる動き

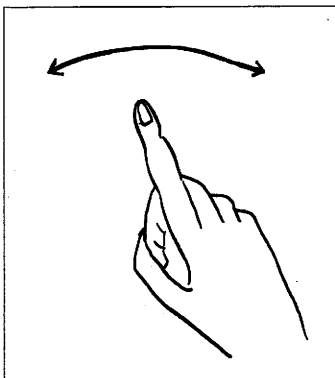


(絵4)

* 対応する楽器

・シンバル ・身体楽器（手拍子） など

[D]のパターン……左～右交互の動き

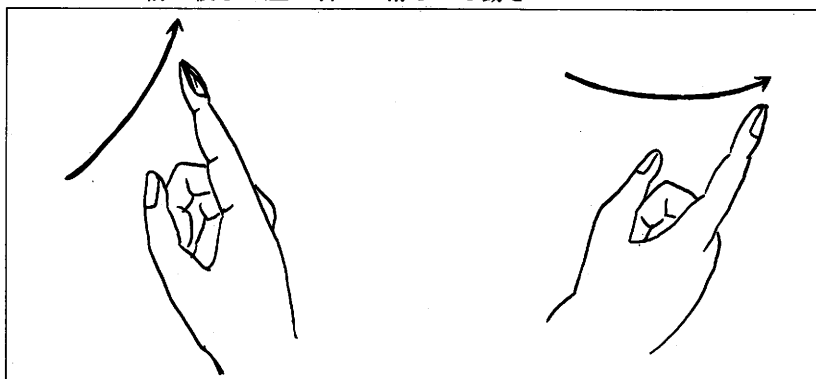


(絵5)

* 対応する楽器

・ウッドブロックなど

【E】のパターン……前～後また左～右へと滑らせる動き

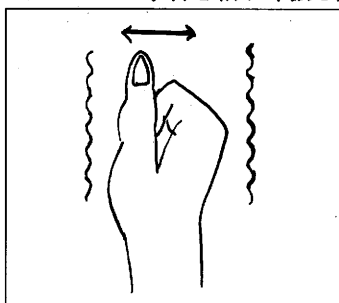


(絵6)

* 対応する楽器

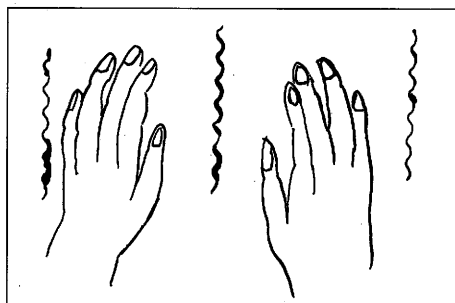
・ギロ　・木琴や鉄琴（グリッサンド）　・その他バイオリンの仲間など

【F】のパターン……手首を細かく振る動き



(絵7)

または

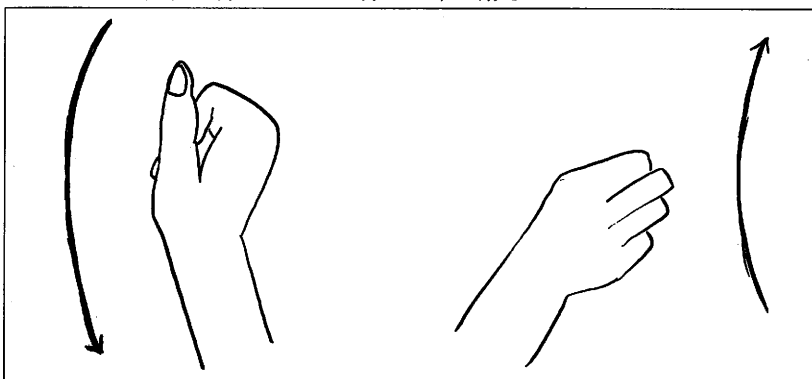


(絵8)

* 対応する楽器

・タンブリンや鈴、トライアングル（トレモロ）など

【G】のパターン……弧状に打ちおろし、打ち上げる動き

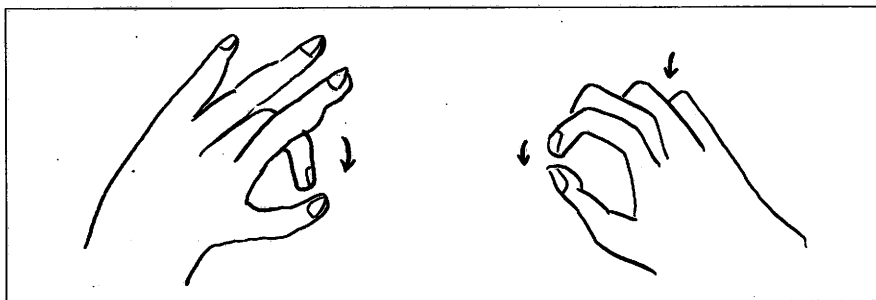


(絵9)

* 対応する楽器

・大太鼓など

Hのパターン……指先を使つての動き



(絵10)

* 対応する楽器

・鍵盤ハーモニカ ・オルガン ・その他ラッパや笛の仲間など

以上のように、幼児が日常親しんでいる楽器について、その奏法から視てとれる動きを類別してみると、ある一定のパターンに整理することができる。

では次に、動きが示唆するイメージの視点から模式的な事例による分析を試みることにする。

2. 動きが内包するイメージ

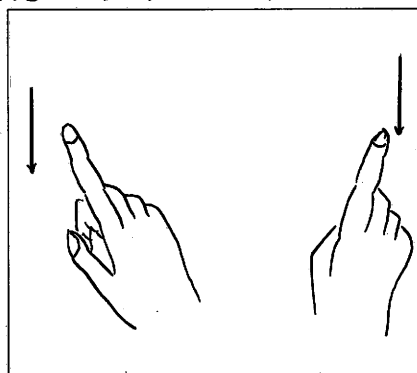
Aのパターンから

例① “おいで おいで”



(絵11)

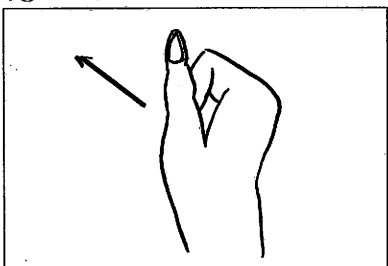
例② “あの子に この子”



(絵12)

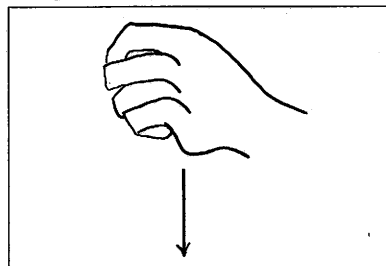
Bのパターンから

例① “トントントン ドアをノック”



(絵13)

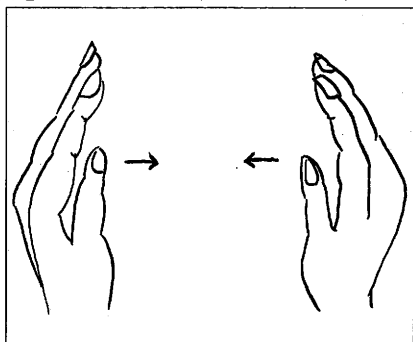
例② “かなづち コンコン”



(絵14)

□Cのパターンから

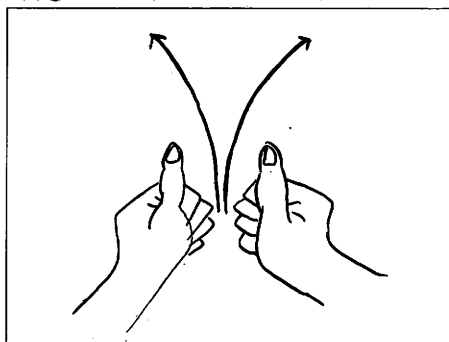
例① “ちいちゃく ちいちゃく”



(絵15)

(すこしずつ、そっとそっと打ち合わせる。)

例② “ジャンジャカ ジャーン”

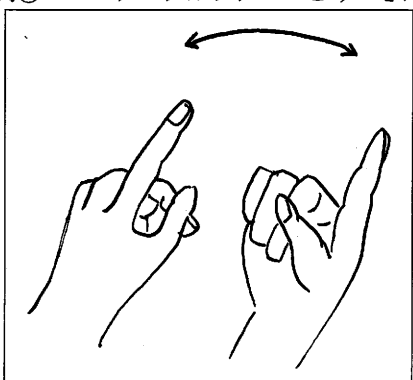


(絵16)

(急いよく 喜びの気持ちで打ち合わせ、打ち上げる。)

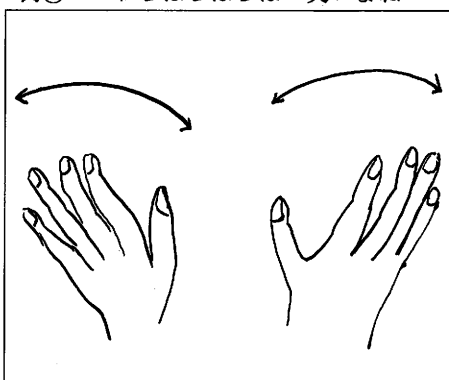
□Dのパターンから

例① “コチコチカッチン とけいさん”



(絵17)

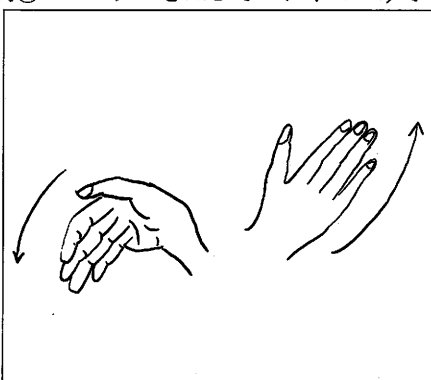
例② “わっはっはっは 笑いまね”



(絵18)

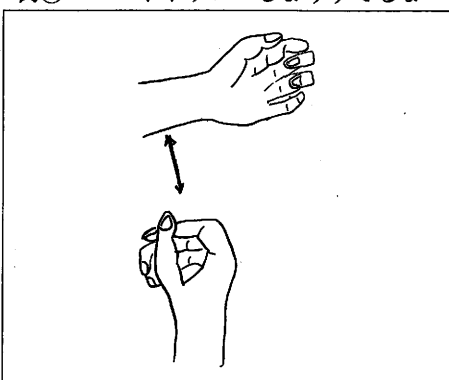
□Eのパターンから

例① “バターをぬって ジャムつけて”



(絵19)

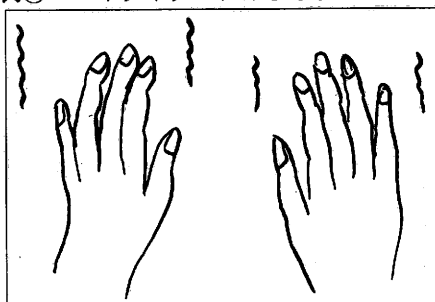
例② “バイオリン じょうずでしょ”



(絵20)

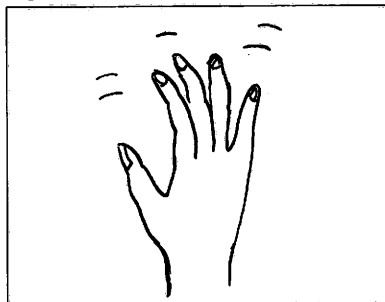
【F】のパターンから

例① “キラキラ おほしさま”



(絵21)

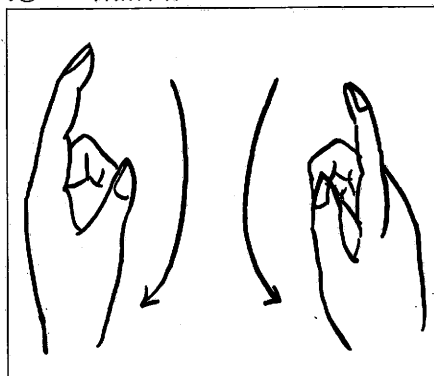
例② “お手々をふって バイバーイ”



(絵22)

【G】のパターンから

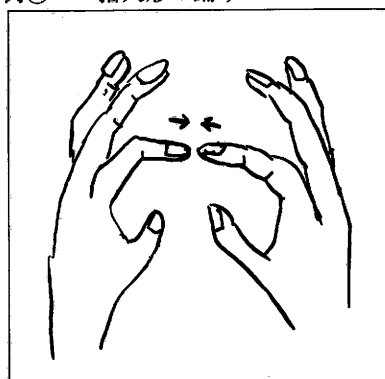
例① “名指揮者”



(絵23)

【H】のパターンから

例① “指人形の踊り”



(絵24)

以上、【A】～【H】のパターン毎に、その動きから連想されるイメージを、例示の形で概観したのであるが、これは当然のこと網羅～系統化の対象となる性格のものではない。活用への示唆として生かしたいと思う。

Ⅲ 遊びの事例の分析と考察

ここでは、Ⅰ. 遊びに見られる模擬演奏的な動きの実態を、Ⅱ. 模擬演奏の動きの分析に照らして考察を進めることとする。併せて、その行動の中で啓培されているであろう音楽的感覚（リズム感）面の視点についても精査を進めたい。

1. 特徴的なリズムに結んで誘発された動きの分析

動きのパターン	体得されるリズム感
<p><事例1></p> <ul style="list-style-type: none"> 皿やコップを叩く動き……上・下の動き～【A】 手拍子……上・下または左・右の打ち合わせ～【A】・【C】 踊り……拍子やリズムに反応 歌詞の内容に結ぶ動き 	<ul style="list-style-type: none"> 4 拍子 アウフタクトのリズム 3つ打ちのリズム

<p><事例2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パイオリンのひきまね……右手・右腕による左・右の動き（弓の動き）～[E] ・ フルートのふきまね……両手指先の動き～[H] ・ たぬきの腹鼓……両手をにぎり、左右交互の手による腹前で前・後の動き～[D] 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2拍子 ・ アウフタクトのリズム ・ 歌詞（擬音唱）に結んであらわれるリズム
<p><事例3></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指揮者……全身によるリズム反応（上・下～左・右～前・後の両腕のふり）～[A]・[G] ・ 木琴のひきまね……上・下の動きと右～左～右の滑奏の動き～[A]・[E] ・ 手拍子……上・下また左・右の打ち合わせ～[A]・[C] 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4拍子 ・ マーチのもつリズムカルな拍感
<p><事例4></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ピアノのひきまね……指先、両腕の動き～[H] 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4拍子 ・ シンコペーションのリズム

2. 題材からくるイメージに結んだ動きの分析

<事例1>

- ・ げんこつにした両手を上・下に打ち合わせる動き……**[B]**の例②
- ・ 口前で両手を開閉しておっぱいをのむ動き……**[A]**の例①の変形

<事例2>

- ・ “さいたさいた”で両手を上にあげ、おおいかぶさるような動き……**[A]**の例①
- ・ “パツとさいた”で両手をパツとひろげ、打ち合わせてジャンプ……**[C]**の例②
- ・ “かぜがそよふく”で両手を左～右に揺らす動き……**[D]**の例①の変形

<事例3>

- ・ 高いところから手をキラキラさせて打ちおろす動き……**[F]**の例①

以上のように、事例を分析してみると、子ども達が即興で動く遊びの中では、その音楽が持つ特徴的なリズム（フレーズ）が刺激となって、それに反応する模擬演奏的な動きの要素が主流を占め、対応する音楽的感覚に結ばれていることがよく判るのである。そして、さらにはイメージに裏打ちされたかわいらしい心情表現の側面が注目すべきものとして浮かび上がってきている。この動きでは、圧倒的な比重を叙情的な描写表現の要素が占めているが、この面の精査は、テーマを独立させて別の機会での補遺を期したいと思う。

IV 模擬演奏的な動きの活用

ここでは、「模擬演奏的な動きの活用」について、音楽的活動の別に事例を示し、模式的な指導様式への原理的な示唆を探りたいと思う。

〔歌遊び・楽器遊び〕

活用事例① 「お化けなんてないさ」（槇みのり詞・峯陽曲）……**[A]・[E]・[F]**

[A] … 怪獣のように両手を上にあげ、おおいかぶさるように上下に振る。（タンブリンや拍子木など）

[E] ……両手を目のあたりに置き、目を左右にこするように動かす。(ギロ、木琴のグリッサンド奏など)

[A]² ……右手人さし指をたてて、上下に振る。(トライアングルなど)

[F] ……両手を握って胸前におき、ぶるぶるふるえるように動かす。(トライアングルでのトレモロ奏など)

Allegretto

動きのパターン **[A]¹** ----- **[E]** -----

動きのリズム

う た

おばけなんてな いき おばけなんてう そき ねーばけ たひ とが みまぢが えた のき

だけどちょっとだけちょっとは くだって こわいな おばけなんてな いき おばけなんてう そき

(楽譜 1)

活用事例② 「メリーさんのひつじ」(相馬一郎詞・外国曲) …… **[A]・[B]**

[A] ……メリーさんを指さすように上下に動かす。(カスタネットなど)

[B] ……両手こぶしをあごの下につけて上下に動かす。(鈴など)

あいらしく ♩ = 92

動きのパターン **[A]** ----- **[B]** -----

動きのリズム

う た

メ リ さ ん の ひ つ じ ひ つ じ ひ つ じ

メ リ さ ん の ひ つ じ し ろ い ひ つ じ

(楽譜 2)

活用事例③ 「おはなしゆびさん」(香山美子詞・湯山昭曲) ……**D**¹・**A**

D¹… 歌詞の流れにのって両手の指どうしをくっつけたり離したりして左右に動かす。(ウッドブロックなど)

A… 右手をあげて挨拶するように上下に動かす。(タンブリンなど)

D²… 両手でおなかを前後にたたいたり、両手を顔の横で左右に動かす。(笑いまねに合う楽器)

たのしくあそぶきもちで ♩ = 108 ~ 112

動きのパターン: **D**¹ (first system), **A** (second system), **D**² (third system), **D**¹ (fourth system)

動きのリズム: 4/4 beat pattern with eighth and quarter notes.

う た:
 このゆびパ パ ふ とっ ちよパパ やあや あや あや あ
 ワハハハハハハ おー はな し する

(楽譜 3)

活用事例④ 「うんどうかいのうた」(稲葉雄次詞・飯田秀一曲) ……**G**・**C**

G… バトンを持っているつもりで、また運動会の応援のつもりで右手を弓なりに動かす。(大太鼓など)

C… 手拍子、特に付点の歴時は両手を打ち上げるように動かす。(シンバルなど)

げんきよく ♩ = 96

動きのパターン: **G** (first system), **C** (second system), **G** (third system)

動きのリズム: 2/4 beat pattern with eighth and quarter notes.

う た:
 そらはあおぞら きれいだ な ドン となったら かけっこ だ
 フレフレ あか フレフレ しろ きょうはうれしい うんどうかい

(楽譜 4)

活用事例⑤ 「とんとんとんとん ひげじいさん」(作詞者不詳・外国曲)……[H]

[H]…… 1音ずつ上行する旋律に従って手遊びが構成されている。はじめは、両手の指どうしを親指から順番にリズムにのって合わせていく。それをそのまま指の踊りに結ぶ。
(鍵盤ハーモニカ、オルガンなど)

♩ = 112

動きのパターン

動きのリズム

う た

とんとんとんとん ひげじいさん とんとんとん こぶじいさん

とんとんとん てんぐさん とんとんとん めがねさん

とんとんとん うさぎさん きらきらきら てはおひさ

(楽譜 5)

さて、以上は、特に歌遊び、さらに“この模擬演奏的な動きこそは楽器をもたない楽器遊び”の解釈から楽器遊びへの適用を発想、事例を示したものである。

なお、「感性」に総括される鑑賞遊び、さらにイメージ豊かな表現力の育ちを約束する即興的創作遊びへの適用については、模擬演奏に結ぶ扱いへの重要な示唆を置くことで論旨の要約に代えたいと思う。

〔鑑賞遊び〕

- * “○○になりきって”——リズムや曲想の特徴をとらえた模擬演奏的な動きを活用する。
- * “オーケストラの一員になりきって”——使われている楽器、親しみのある楽器の模擬演奏の動きを活用する。

〔創作遊び〕

- * 曲のリズムや旋律の動きにのった即興的なリズム反応にあらわれる模擬演奏的な動きを活用する。(参照～Ⅰ－２．＜事例３＞)
- * 擬音・擬声・擬態などに結んだリズム表現における模擬演奏的な動きを活用する。

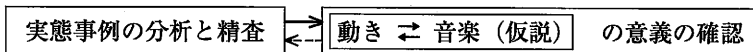
結 論

音楽への自由かつ自然な反応として現われる動きの要素を、模擬演奏または模擬演奏的な動きに見立てて類型の構成をはかり、方法への裨益を意図した今回の着想の研究では、創造性を指向する実践への原理確立に向けて次のような結論を得ることができた。

- * 主題が含みもつ教育的意義は、仮説したところにたがうことなくまことにじゅうぶんである。

そのための根拠として次の３つの側面を挙げることができる。

① 立論による証明



② 活用事例の考察による証明

活用の効果は、歌遊び、創作遊び、鑑賞遊びの全域においてじゅうぶんである。

- ③ 特に、楽器遊びにおいては、動きが、主軸をなす打楽器の発音の原理（打つ・こするが中心）にかない、奏法の扱いに直接的なつながりをもっている。

- * 核となる動きを誘発する主要因としては「その曲を特徴づけているリズム」（注１）、および「題材・曲想などから醸成されるイメージ」（注２）の２点を抽出することができる。

注１……６要素の中に位置づく「リズム」

- ・構成要素—— リズム、旋律、和声
- ・表現要素—— 音色、速度、強弱

なお、このリズムでは、“フレーズの形をなす中において”ということが条件となる。

注２……逆に、「動きが内包するイメージ」（Ⅱ－２）の内容は、歌遊びや鑑賞遊び、また創作遊びにも生きてはたらくはたらきを持つ。

以上、感動が具体的なイメージを生み、それが音楽的に形式化され主としてリズム面で姿・形を変えた動きとして発現する——この音楽を感覚的にとらえて、まず身体で表現する喜びを味わわせる視点～その活用こそが子どもの成長を約束するものである。これが結論である。

なお、今回の研究にかかわって、その補遺と発展のために、次の３点への今後の取り組みを忘れないようにしたい。

１．題材からのイメージに結んで表現される動き（Ⅰ－２）のうち、Ⅱ－１において類型づけられなかった動き、および“動きが内包するイメージ”（Ⅱ－２）からはみ出す部分への対応について

２．運動技能と奏法技能の協応にみる系統性の問題について

３．楽しい動きを呼ぶ人的環境について

この命題に対しては、多少の脚注を置くことにする。

すなわち——“今回の主題のためには、特にこのことのかかわりが重大である。渋谷伝が標

榜する「環境の整備はものよりひと（人）論です。動いて変化すること論を大事にしたい」のことばは、この場合千金の重みをもつからである。特に、生きたモデルとしての保育者の環境に焦点化し、創造性と表現力の視点から攻究を進めたいと思う。

引用文献

- 1) 星野圭朗著「オルフ・シュールベルク理論とその実際」全音楽譜 1979年 16～26
- 2) エミール・ジャック＝ダルクローズ著／板野平訳 リトミック論文集「リズムと音楽と教育」全音楽譜 1975年 38～62
- 3) 村浦とく著「舞踊創作とイメージ構成」明治図書 1973年 7～12

参考文献

- 1 網代景介・岡田知之共著「打楽器事典」音楽之友社 1981年 1～290
- 2 近藤充夫 論説「運動技能の獲得過程からみた音楽表現」音楽教育研究 1981年春号 第24巻2号 音楽之友社
- 3 渋谷伝著「幼児期の音楽と表現」音楽之友社 1982年 113～158
- 4 菅原明朗著「楽器図説」音楽之友社 1976年 18～106
- 5 高杉自子監修「3才児のイメージと表現」チャイルド本社 1984年 5～73
- 6 名須川知子「幼児の身体表現と保育～表現の核心を育てる～」保育学年報 1989年
- 7 村浦とく・加藤礼子・山里陽子・野口寿美子著「子どもの表現力を高める舞踊」明治図書 1988年 6～28
- 8 W・ケラ／F・ロッシュ著 橋本清司訳註「ORFF-SCHULWERK 子どものための音楽解説」の中の「諸楽器の奏法」音楽之友社 1971年 15～33